

ぶんかざい おおた

令和3（2021）年9月 発行

大田区教育委員会 大田図書館 編集
文化財担当

〒143-0025
東京都大田区南馬込五丁目11番13号
（大田区立郷土博物館内）
TEL 03-3777-1281 FAX 03-3777-1283

目次

- ◆トピック
「数江家住宅」が国登録文化財となりました…………… 1
- ◆令和2年度事業報告…………… 3
- ◆久ヶ原遺跡の古墳時代後期の集落について…………… 4
- ◆大田区立郷土博物館ホームページリニューアルについて…………… 5
- ◆新刊のご案内…………… 6

第24号

トピック 「数江家住宅」が国登録文化財となりました



数江家住宅主屋 外観

令和2年8月17日付で、久が原2丁目に所在する「かずえ けいじゅうたくしゅおく数江家住宅主屋」が国登録有形文化財（建造物）となりました。

「文化財登録制度」は平成8年（1996）から始まったもので、建造物については築50年を経過した歴史的建造物のうち、一定の評価を得たものを国が文化財として登録することで、「指定」よりも緩やかな規制の中で保存・活用を促そうというものです。

区内では28件目の登録となり（うち2件は解除）、代表的なものでは「昭和のくらし博物館（南久が原2-26-19）」や、区立勝海舟記念館（南千束2-3-1）として公開活用されている「ほうおうかく きゅうせいめいぶん こ鳳凰閣（旧清明文庫）」があります。



当建造物は個人の住宅であり、内部の自由見学はできません。無断での敷地内立ち入りや、外観以外の写真撮影及び公開等の迷惑行為はご遠慮ください。



数江家住宅の魅力

数江家住宅の特徴は、道路に面した正面（西側）外観がアーチ状の玄関ポーチなどを採用した、いわゆるスパニッシュ様式※でありながら、内部は茶の湯を行うことを前提に設計され、本格的な数寄屋風の意匠を併せ持っているという点です。建築当初の施主夫人が茶の湯を嗜んだことからこうした設備が配され、その後同じく数寄者として知られた数江教一（茶号：瓢鮎子、1913-2003）一家に受け継がれ、今日まで大切に保存されてきました。戦後、占領軍による接収の対象となりましたが、「営業をしていけば免れることができる」との助言を受け、旅館として運用されていたこともありました。

建築の記録・記念である棟札は確認されていませんが、建築年は昭和14年（1936）で、設計者は多くのスパニッシュ様式建築を残した松ノ井覚治（1896-1982）といわれています。松ノ井は早稲田大学卒業後に渡米し、コロンビア大学で建築意匠を学ぶ傍ら、現地で数々の建築事務所に勤務しました。昭和12年に帰国するとヴォーリズ（W・M・Vories、1880-1964）建築事務所に勤務し、後に東京事務所長を務めました。

松ノ井は住宅・教育施設・キリスト教会などを中心に手がけましたが、その中でも数江家住宅のような和洋折衷様式は極めて異色であり、しかも建築当初からほとんど改修されていない点でも非常に貴重な事例です。建築史上、日米両国で最初期に活躍した日本人建築家の数少ない遺産として、また大田区の歴史的景観に寄与する建物として、次世代に語り継ぐべき文化財であるといえます。

※スペイン発祥で、植民地化したアメリカ大陸において先住民族の建築様式と融合して発展した様式

久が原地区の形成

数江家住宅の建つ久が原地区は大田区の北西部に位置し、元々は農村地帯でしたが、関東大震災の発生による郊外住宅の需要拡大などにより、耕地整理、すなわち本来的には農業経営の合理化という名目で開発された地域です。この傾向は区内のいわゆる「内陸部」全体に見られ、大正15年（1926）に発足した池上西部耕地整理組合によって宅地化が進められた久が原地区は、田園調布の開発に続いたため新田園調布とも称されました。現在も久が原の台地上は碁盤の目のように整然と区画され、郊外宅地開発の典型的な例となっています。在地の地権者らで組織された耕地整理組合による開発であったこともあり、個々の住宅に関しては統一性を持たせずに造成されていったため、田園調布の街並みや同潤会住宅分譲地のような、計画的に造り込まれた景観とは違いかたちでの発展を遂げていきました。とは言え、それこそが久が原地区の歴史的背景を示す景観であることも間違いありません。久が原地区が属する旧大森区域の人口推移を見てみると、大正末にはおよそ10万人だったのが昭和10年代初頭には20万人以上に膨れ上がっており、昭和7年に成立した東京市の一端として大きな変化を遂げていったことがわかります。

池上西部耕地整理組合による事業は昭和12年2月に完了し、台地上には一大住宅地が形成されました。当時の建造物は戦火で失われたり、老朽化などにより建て替えられたものも多く、現在ではほとんど残されていません。そのような中、数江家住宅は現在も良好な状態が維持されています。そこには、徐々に戦時色が濃くなる中でも良質な材料、優秀な大工技術を確保して建てられたことと、何より居住者の並々ならぬ努力があったことは言うまでもありません。



数江家住宅の玄関部
（撮影：須藤史朗）

令和2年度事業報告

文化財映像記録

東京都指定無形民俗文化財「延命寺双盤念仏」の映像記録事業を実施しました。

双盤念仏とは、平安時代以来の引声念仏の流れを汲む仏教行事が大衆化したものです。鉦4つと太鼓1つを打ち鳴らしながら、独特の節をつけて念仏や阿弥陀名号を唱えます。江戸時代には寺院で双盤講が組織され、明治～大正期に流行しました。今泉延命寺（矢口2-26-17）でも江戸時代から双盤念仏が行われていたようです。戦時中に多くの双盤講の活動が途絶えてしまいましたが、延命寺では戦後に再興され、平成3年（1991）には都内に残る双盤念仏の一つとして、用具とともに都の指定文化財となりました。

延命寺の双盤念仏がいまに伝わったのは、双盤講の人々による柔軟な工夫のたまものです。かつての双盤念仏は口伝直伝を原則として継承されていましたが、戦後の再興に尽力した原豊治氏は鉦の「叩き」や念仏の「譜」を図にし、ベニヤ板に記して、双盤念仏を習得しやすくしました。また、もともと双盤念仏は大人の男性による宗教行事でしたが、この講では譜面を作るにあたって協力した原道子氏などの女性を奏者として招きました。一般的な講のかたちこだわらずに後継者をつなぐことにより、存続の危機を乗り越えてきました。現在この伝統を守り伝えているのは、太鼓役を務める岡崎剛一郎氏を中心として平成30年度に立ち上げた「今泉延命寺双盤講保存会」の方々です。双盤念仏の奏者以外にも行事・芸能の存続発展のための協力者を募り、寺の行事のほか地域行事や学校行事とも連携を図りながら保存活動を進めています。とくに注目されるのが平成30年にはじまった子ども向けワークショップで、次世代への継承のための斬新な取り組みは戦後の再興期からつづくこの講の特色でもあります。

現在の奏者は練習生を含めて11人です。円熟した技を持ったベテランがそろっていますが、それを受け継ぐ若手の確保は依然難しい状況が続いています。この度、継承者育成の補助とすべく、技の熟達した現時点での演奏形態を撮影し記録することとなりました。練習用の記録映像には、譜面だけでは習得の難しい念仏音声も聞き取れるように録音しています。それとは別に活動記録映像を作成し、東京文化財ウィーク2020に際しての特別公開時の演奏、日々の練習の様子、双盤講保存に尽力した先人へのインタビューなどを収めました。活動記録映像はDVDビデオで区内各図書館や区立小中学校に配布したほか、保存会ホームページでも公開していますので、区民の皆様にもいつでもこの文化財に触れていただけるようになりました。ぜひ一度、活動の様子をのぞいてみてください。

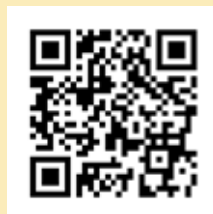


映像記録DVD

『延命寺双盤念仏』活動記録編



練習の様子（DVDビデオ収録）



今泉延命寺双盤講保存会
HPへのQRコード



『延命寺双盤念仏』
活動記録編へのQRコード

*令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年開催している文化財公開見学会および文化財講演会は執り行いませんでした。

遺

跡

久ヶ原遺跡の古墳時代後期の集落について

今号では、近年で調査例が増えつつある久ヶ原遺跡の古墳時代後期の集落について紹介します。

久ヶ原遺跡は南関東の弥生時代後期を代表する大規模な集落遺跡として著名ですが、これまでの調査から古墳時代初頭（3世紀後半）では、住居跡が遺跡の北西側に集中し、小規模な集落が営まれたことが明らかになりつつあります（図1）。

前号で報告した久が原六丁目6番地点の発掘調査では、古墳時代後期（6世紀～7世紀）の把手付甕とってつきかめの破片が出土しており、この遺物の存在は調査地点の近辺に同時期の住居跡などの遺構が存在したことを予測させるものです。

なお、現在までに古墳時代後期の住居跡が検出されたのは、久が原五丁目27番地点、同四丁目39番地点、同六丁目13番地点の3地点です。久ヶ原遺跡

内での位置は、久が原五丁目27番地点が東側、四丁目39番地点が北西側、六丁目13番地点が西側にあります。そして、把手付甕とってつきかめの破片が出土した六丁目6番地点は西側に位置します（図1）。

検出された住居跡について、五丁目27番地点では、住居の周溝しゅうこうと床面がわずかに残存しており、床面の上から出土した遺物より、住居跡が帰属する時期は7世紀代と推定されます。ほか2地点では、住居内から出土した遺物から、住居跡が帰属する時期は、六丁目13番地点が6世紀後半～7世紀前半（大田区教育委員会 2015）、四丁目39番地点が7世紀前半～中葉頃と推定されます（北原・野本 2007）。

中でも、四丁目39番地点と六丁目13番地点で検出された住居跡には、内部の施設や構造に共通点が認められます。ここでは遺構の大半を調査することができた六丁目13番地点の住居跡について紹介します。

六丁目13番地点の住居跡の平面形は方形です。規模は検出された範囲で長軸4.5m、短軸3.7m、検出面から床面までの深さは最深で62cm、住居の壁がほぼ垂直に立ち上がるたてあな竪穴式の構造です。住居跡の主となる柱は4本で、西壁の北側よりにカマド、南側には貯蔵穴ちようぞうけつが設けられ、柱の穴の配置とカマドの位置から、出入口部は東側にあったことが推定されます。カマドの構築材は白色粘土で煙道部は住居跡



図1 久ヶ原遺跡 発掘調査地点（推定地点を含む）
（大田区立郷土博物館作成）

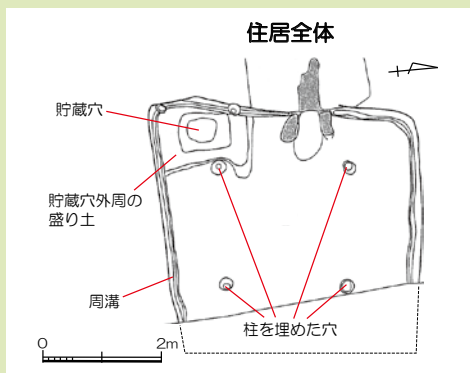


図2 久が原六丁目13番地点 住居跡実測図
（大田区立郷土博物館作成）



写真1 久が原六丁目13番地点 住居跡全景（東から）
（大田区立郷土博物館作成）

の外側へと長く伸びます。周溝はカマド部分を除いて全周します(図2、写真1・2)。

注目される点は、住居跡のカマド周辺に構築材の粘土が塊の状態で散らばっていたことです。この状況から住居の廃棄時に人為的に壊されたことが考えられます(写真2)。このような痕跡は四丁目39番地点においても認められます。

これまで50回以上の久ヶ原遺跡の調査において、遺構は主に弥生時代後期に帰属するものが検出され、古墳時代後期の住居跡はほとんど検出されてきませんでした。しかし、これまで述べてきたような近年の遺物の出土事例や住居跡の調査結果から、古墳時代後期には遺跡の北西側から西側の辺りと東側の一部に、小規模な集落が点在していたことが十分に予測されます。この検証については今後の調査をご期待ください。

なお、今号で紹介した久が原六丁目13番地点の調査成果については、大田区立郷土博物館の常設展示でご覧いただくことができます。

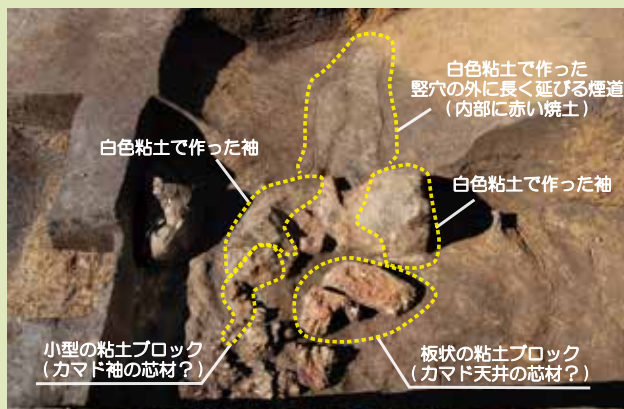


写真2 久が原六丁目13番地点
住居跡カマド検出状況(東から)
(大田区立郷土博物館作成)

[参考・引用文献] (この2冊は郷土博物館で販売しています)

大田区教育委員会 2015 「1. 久が原六丁目13番A地点の調査」『久ヶ原遺跡Ⅴ 山王遺跡Ⅴ 下沼部貝塚Ⅱ 発掘調査報告』大田区の埋蔵文化財 第22集

北原實徳・野本孝明 2007 「4. 久が原四丁目39番地点の調査」『久ヶ原遺跡Ⅰ 山王遺跡Ⅰ 大森射の場跡横穴墓群Ⅱ』大田区の埋蔵文化財 第18集 大田区教育委員会



郷土博物館のホームページがリニューアルしました!



今年4月の大田区立郷土博物館リニューアルオープンに伴い、郷土博物館のホームページもリニューアルしました! リンクバナーがカラフルでかわいい写真や職員直筆のイラストになり、コンテンツも増え、よりわかりやすく楽しいホームページになりました。

新しいコンテンツとしては、有形・埋蔵など様々な専門分野がある文化財をわかりやすく解説した【文化財寄稿集】を作成しています。その内容は、難しい文化財・歴史用語を解説した「総論・用語解説編」、区内の文化財を紹介した「各論・資料紹介編」、文化財を学びながら歩いていただく「歴史おさんぽマップ」と盛りだくさんです。ほかにも、季節ごとの展示やイベント情報のリンクが掲載されます。

今後も利用者の皆さまにわかりやすく大田区の文化財などを知っていただけるよう、内容を拡充していきたいと思います。

右のQRコードからもアクセスできますので、ぜひ一度ご覧ください。



QRコード



郷土博物館ホームページ トップページ(一部)



1 大田区歴史散策ガイドブック「雪谷・千束編」「嶺町・田園調布編」

平成17年(2005)に発行した『大田の史跡めぐり(増補改訂版)』が完売となったため、まち歩きガイドブックとして内容を大幅に刷新しました。1冊ごとに数時間～半日程度で歩ける範囲でモデルコースを組んで提示し、実際に文化財関連施設に足を運んでいただくことを目的として、地区別にみどころを紹介した内容となっています。これまでに刊行された「六郷・羽田」「蒲田・糎谷」「大森・山王」「鶉の木・矢口」「馬込・新井宿」「池上・久が原」の6編とあわせて、区内を8地区に分けてご案内しています。

「雪谷・千束」編では、東急池上線・石川台駅周辺の雪ヶ谷八幡神社(東雪谷2-25-1)、石橋供養塔(石川町2-8地先)や、平成30(2018)年度に都指定名勝となった「洗足池公園(南千束2-33他)」の周辺を紹介したコース、「嶺町・田園調布」編では御嶽神社(北嶺町37-20)や密蔵院(田園調布南24-18)、多摩川台公園(田園調布1-63他)の古墳群などを紹介したコースとなっています。価格は1冊あたり100円です。

「嶺町・田園調布」編



「雪谷・千束」編



あらいじゆくよこあなぼぐん

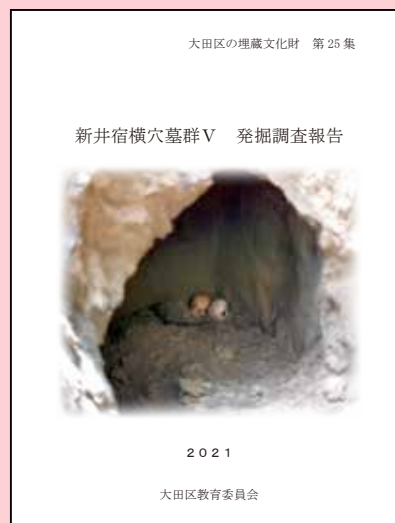
2 新井宿横穴墓群V 発掘調査報告書『大田区の埋蔵文化財』第25集

横穴墓は、古墳時代の終わりから奈良時代にかけて造られた古代人のお墓です。斜面地の多い大田区は、全国でも有数の横穴墓密集地帯として知られています。

本書で報告する山王四丁目30番地点の横穴墓は、大森駅の西南西約400m付近を頂部として西向きに派生した馬蹄形を呈する谷の斜面部に展開する新井宿横穴墓群(大田区遺跡番号125)の中の南端に位置します。弁天池を有する山王厳島神社の南側から北西方向に張り出した舌状台地の東側斜面で、1基の横穴墓が発見されました。

横穴墓の墓室には成人人骨3体と未成年骨3体、合計6体が埋葬されていました。副葬品などの遺物は出土しませんでした。横穴墓の平面形態や構造から概ね7世紀後半以降に構築されたと考えられます。

新井宿横穴墓群の中でも南側に展開する横穴墓の検出は少なく、貴重な調査事例を追加することができました。なお、本書には埋葬人骨の形質人類学的分析の成果も収録しています。価格は1冊あたり1,000円です。



「数江家住宅」について更に詳しく知りたい方は、『大田区の文化財』第42集「大田区歴史的建造物調査報告書」や『大田区立郷土博物館紀要』第18号も合わせてご参照ください。両方とも郷土博物館で販売しています。

なお歴史的建造物の見学については毎年多くのお問い合わせやご希望をいただいておりますが、ほとんどが個人の住宅であり、日常的に公開できるものではないため、今後必ずしもご期待に沿う結果とはなりませんことをご理解いただけますと幸いです。